

軍人たちの 伝統

——かかる軍人ありき——

伊藤桂一

目次

ある舟艇の話 5

無人機「太刀十八」発進の夢 27

笹舟の記 63

運命のきずな 99

軍医われ生き残りて 143

中隊長の伝統 181

生き残りの大隊長 207

あとがき 248

あとがき

私が「別冊文藝春秋」に「戦犯記」という作品を書いたのは、三十年ほども以前のことである。爾来、このシリーズは断続していて、このたび「軍人たちの伝統」という一巻がまとまることになった。

このシリーズでは、主として職業軍人の美談を材料としてきている。むろん実録である。戦後、軍人や軍隊に対する露悪的な記事や言辞が氾濫しつづけ、その風潮は、現在も、自虐的史観の中で生きつづけているが、軍人には軍人にしかない立派な人格、人生観、死生観、及びそれにもとづく言動があるのではないか、それにまったく眼をつぶってよいのか、という意見が、戦記作家である私にもあった。この考えは、歴代の「別冊文藝春秋」の編集長に引きつがれてきて、私は二十篇ほどの作品を「別冊文藝春秋」に書いてきている。私に対して、もっとも熱心な督励者は高橋一清編集長で、私は高橋氏にいわれては、恰好の人物さがしに努力してきている。ただ、美談の持主というのは、ご自分

からは決して語らないので、人物さがしには、ずいぶんとむつかしいところがあった。

このたびの「軍人たちの伝統」をまとめるについても、いろいろとお世話になった方たちも多いし、また資料についても触れておきたいので、簡略ながらも、解説を加えさせていただきますと思う。シリーズ執筆間に、亡くなられてしまった方々もあるので、その方々には、謹んで、ご冥福をお祈りいたしておきます。

「ある舟艇の話」(昭和五十一年)

この作品は軍人美談というより、めずらしい体験をした兵隊の話を中心にして、軍隊や戦場というものを、変わった角度からみてもらうためには、きわめて役に立つかもしれない。この作品は、私も所属した部隊の戦友会仲間、金子勇、高松秀雄、土屋正君たちをモデルにしている。いま考えてみて、この作品の中のテレビ番組の企画は、実に有意義であったと思う。ただ、この作品を書いた時点では、ビデオデッキはめずらしいものだったので、この点を承知してお読みいただきたい。

「無人機『太刀十八』発進の夢」(平成四年)

この記録は、戦後五十年余を経てみると、ある種の感慨が、改めて、読む方たちの胸

に湧いてくるのではないだろうか。一発サイパンにぶちこんでやりたかった、という思いをすてがたい。「太刀十八」の研究に尽瘁じんすいされた多賀久生氏は、先年亡くなられた。文中に登場される加藤卓男氏は、現在ますますご健在である。多賀氏は、私の郷里の先輩である故駒田信二氏と中学の同級生で、駒田氏を誘って多治見の加藤卓男先生の窯場へ通われたが、私も何度か同行し、車中で、この「太刀十八」の話もきいたのである。

「笹舟の記」(平成五年)

この作品は、発表の時、左の如き〈作者付記〉を添えている。

「この作品は『鴉一会報』(鴉第三〇六一部隊戦友会刊)所載の、斉木礼助氏の手記「溪河村物語」を資料としています。斉木氏は昭和五十三年に死去されています。因みに私(伊藤)は、二度目の軍務で、鴉第三〇六四部隊に所属し、広徳作戦の折は、糧秣りょうま輸送隊の一員として、作戦に参加しています」

「鴉一会報」は、犬山市在住の成瀬光雄氏(戦友会責任者)からいただき、斉木氏についての補足的な話もうかがった。「笹舟の記」という作品は、戦記としては、きわめてめづらしい、美しい、純愛物語だと思ふ。

「運命のきずな」(平成六年)

この作品をまとめるには、左に掲げる多くの資料を参照した。資料の収集には高橋一清氏の協力を負うところが多かった。

〈参考資料〉

* 「昭和史の天皇10」(読売新聞社)

* 「証言・私の昭和史3」(学藝書林)

* 「現代キリスト教と将来」(古屋安雄・新地書房)

* 「ロハス大統領を偲びて」(神保信彦・日比協会)

* 「徳不孤」(一九六二年二月一日・中華民国「中華週報」第一九二号)

* 「朝日新聞」「時事新報」等の記事及び神保隆子(未亡人)池辺明子(次女)西村源

一 (元神保部隊・柘家社長) 本間清江(信彦氏妹) 氏らの談話と記事。

「軍医われ生き残りて」(平成七年)

田村久弥氏は、現在も健在に活躍されていられるが、ご夫人は、先年亡くなられた。

この上ないよき伴侶であった夫人を失われたあとは、お子さん方を頼って、アメリカと日本を往復されながらも、田村氏らしい生き方をされている。回想録のご執筆もすすめ

られている。田村氏の所属された祭兵団の歩兵第六十聯隊の戦友会「祭六〇会」では、会の世話人である竹ノ谷秋男、馬淵裕一、有本勝蔵、竹内堅吉氏らが種々、田村氏を支えられ、本篇の取材についても、なにかとご協力をいただいている。

「中隊長の伝統」(平成七年)

本篇のモデルである山平千代吉氏は、現在もまことにお元気に、テニスの指導で活躍されている。容姿体力ともに壮年としか思えない方である。山平氏は、中隊長であった大塚堅治氏への敬慕の念篤く、取材中もしばしば、大塚中隊長への思いに責められて、言葉を途切らせられたものである。私は本篇が、戦中世代の方たちに、ことに深い感銘を与えるであろうことを信じている。

山平氏の所属された槍兵団(第七十師団)では、さきごろ「槍部隊史」を刊行している。

「生き残りの大隊長ヘレイテ戦における長嶺秀雄少佐」(平成九年)

私の詩友である中平耀氏は、長嶺秀雄氏が陸軍幼年学校の生徒監をされていたころの、教え子である。たまたま、詩の会の席で、中平氏からそのことをきき、このたびの取材

の契機となった。戦中に大隊長をつとめられたほどの軍人は、いまや、貴重きわまる存在というべきであろう。ご長命とご活躍を祈ってやまない。

この本をまとめるについては、文藝春秋出版局の高橋一清氏、欠端順一氏、それに「別冊文藝春秋」編集長の明円一郎氏らに、なにかとご配慮をいただいた。ここに謝意を表します。

文中、また「あとがき」で触れた資料類については、左記に紹介しておきます。

* 「かかる軍人ありき」(光人社・文藝春秋刊の「かかる軍人ありき」イラタジは渦巻くとも)の二巻を合本したもの)

* 「槍部隊史」(北九州市門司区栄町九―二三 橋本食品KK内槍部隊史刊行会)

* 「戦場・学んだこと、伝えたいこと」(長嶺秀雄・並木書房)

* 「日本軍人の死生観」(長嶺秀雄・原書房)

(平成九年六月 伊藤桂一記)

軍人たちの伝統

一九九七年八月一日 第一刷

著者 伊藤 藤桂 一

発行者 和田 宏

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三一二三
電話代表〇三三三六五一一二二一

印刷所 凸版印刷

製本所 加藤製本

定価はカバーに表示してあります
万一、落丁乱丁の場合は送料当社負担で再取替
致します。小社営業部宛お送り下さい

著者紹介

大正六年三重県四日市市に生まれる。昭和一三年入隊。終戦までの七年間、一兵卒として中国大陸を転戦する。戦後、出版社に勤務しながら作家デビュー。昭和三六年、自らの戦争体験を描いた『螢の河』で第四六回直木賞を受賞した。以来戦場小説を発表。静かなノモンハン』で昭和五九年に第一八回吉川英治賞、昭和六〇年に紫綬褒章を受章した。主な作品に『黄土の記憶』『悲しき戦記』などがある。